OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂儒学の研究
Author(s)	藤居, 岳人
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　藤　居　岳　人　）	
論文題名	懐徳堂儒学の研究

論文内容の要旨

本稿は、近世後期の大坂に存した漢学塾懐徳堂の儒学、特に最盛期の懐徳堂における中井竹山・履軒兄弟の朱子学の特質を解明することが目的である。より具体的にいえば、本来的朱子学を「修己」「治人」の双方を重視する儒学と定義したうえで、懐徳堂儒学が本来的朱子学に近づいてゆく様相について検討して、懐徳堂儒学の思想史的意義を明らかにする。上述の課題を究明すべく、本稿は以下の構成をもって考察を進める。

第一部では、懐徳堂の儒者について論じる前提として、まず「儒者」の語と「知識人」の語との関係について検討している。そして、江戸時代の儒者は、寛政改革を契機にその存在様態を変化させたが、その変化の様相を論じる。

第一章では、儒者と知識人の語との関係について考察している。諸研究では江戸時代の儒者に対して「知識人」の語を使用することが多いが、そもそも「知識人」の語には、主に近代の意を含む狭義の知識人と、ただ単に一定の知識を有する者という意味の広義の知識人との二種類の意味があり、近代以前の江戸時代の儒者は近代の意を含んだ狭義の知識人ではない。したがって、議論の混乱を防ぐために、江戸時代の儒者は「儒者」の語のままにしておく方がよいのである。

第二章では、朱子学を受容した江戸時代における儒者の存在様態を、江戸時代中期以前と後期以後とに分けたうえで、中国宋代以降の儒者のあり方と比較しつつ検討し、江戸時代の儒者の性格を明らかにしている。具体的には、儒者は寛政改革を画期として周縁的存在から政治に参画する道を模索する存在へとその性格が変化していることを述べている。

第二部は、最盛期懐徳堂の中心的存在だった中井竹山・履軒の懐徳堂儒学の性格を分析する前提として、まず、竹山・履軒以前の初期懐徳堂の儒学の性格について考察している。その後、竹山・履軒と深いつながりのあった後期朱子学派の儒者を取り上げてその儒学の性格を検討し、竹山・履軒の儒学思想との共通点と相違点とを明らかにしている。以上の論点を中心に、竹山・履軒の周囲の儒者が有する朱子学的立場の様相を分析して、竹山・履軒の頃の最盛期懐徳堂の儒学の特質について考察を進める導入とする。

第一章は、大坂近郊の平野郷の郷学含翠堂と初期懐徳堂との性格を比較検討している。両者はともに庶民自身による庶民教育を志し、また、朱子学や陽明学などの折衷的内容の儒学を講じていたことが共通点なのである。

第二章では、それまでの折衷的儒学を変革して懐徳堂儒学を朱子学一尊にした五井蘭洲の儒学を取り上げ、性説を中心とした彼の朱子学の特徴を分析している。蘭洲が朱子学を尊重するようになったのは、性善説に対する強い思い入れと、性善たる人間が善を実現する最も着実な方法を朱子学が提唱していると彼が考えたこととがその理由である。ただ、蘭洲は、本来的朱子学の核たる「修己」「治人」の双方に通じる儒学的理想像にまではまだ目を向けておらず、それは中井竹山・履軒の兄弟を俟たねばならなかった。

第三章では、中井竹山・履軒兄弟と交流のあった後期朱子学派の儒者、特に尾藤二洲と頼春水とを取り上げて、彼らと竹山・履軒との儒学の性格を比較検討し、両者の異同を明らかにしている。彼らの基本的立場は、教育的分野にみずからの任務を限定しつつ、理を尊重するというもので、竹山・履軒兄弟の朱子学とは相違するものだった。

第三部は、最盛期懐徳堂の儒学における経学研究について考察している。まず中井竹山の経学研究を取り上げるが、竹山による経学研究は多くない。懐徳堂の経学研究の中心的存在は中井履軒であり、第三部では主に基本的に朱子学的立場を保持しつつ独自の立場にあった履軒の経学研究を取り上げて、彼の経学研究の様相を考察している。

第一章は、中井竹山の経学研究を取り上げて、一例として履軒と竹山との『論語』に対する注釈の内容を比較している。履軒の注釈は自説を述べることが多いのに対して、竹山の注釈は自説よりも朱熹の説を引くことが多い。つまり、竹山は基本的に朱子学的立場に従いつつ経学研究を継続している。ただ、その質や量において最盛期懐徳堂の経学研究はやはり弟の履軒が中心だったといえるのである。

第二章から第四章までは、朱子学の基本理念である性善説に対する中井履軒の立場について考察している。第二章は、『論語集注』、特にそこに見える程顥・程頤の注釈に対する履軒の批判的立場について検討している。履軒が程注を批判するのは、まず、程注の解釈が牽強付会に過ぎること、次に程子の性説があまりに理論として完結しており、それを『論語』の注釈に用いることはふさわしくないと履軒は考えていたからだった。

第三章では、中井履軒の経学研究の特徴を明らかにするために、朱子学用語の中心たる性の概念とそれと関係の深い気稟の概念とを取り上げて分析している。確かに朱熹の論理と履軒の論理とは相違しており、履軒は朱熹の性の思想に批判を加えているものの、性善説を保持する基本的立場は両者に共通している。つまり、履軒は基本的には朱子学的立場にあるといってよいのである。

第四章では、朱熹・伊藤仁斎・荻生徂徠の性説と履軒の性説とを比較対照して、履軒が朱熹と同様に性善説の立場を前提としており、朱子学とその基盤を共有していることを明らかにしている。確かに履軒の性説は朱子学の本然の性・気質の性の枠組みにとらわれない独自性がある。しかし、朱子学の最も基本的な立場は性善説を保持することであり、履軒も性善説をその議論の前提としている。とするならば、履軒の立場は、大きな枠組みからいえば決して朱子学の枠外に出るものではないのである。

最後に、朱子学において「修己」「治人」の理想を体現する理想像として聖人があるが、第五章・第六章はその聖人を取り上げて履軒の聖人観を分析している。第五章では、伝統的儒学の聖人観―すなわち、聖人を道徳的人格者像と為政者的理想像との両面からとらえる立場―と履軒の聖人観とを検討している。履軒は朱子学に対して確かに批判的だが、むしろ彼は全体として基本的に朱子学の立場に従いながら、理の概念など、個別の内容について批判していると考える方が自然である。したがって、履軒の聖人観は、朱熹と同様に聖人の道徳的側面と政治的側面とをともに重視する立場だったといえるのである。

第六章では、道を学ぶ者の理想像として聖人をとらえる履軒の聖人観を検討している。儒学では善を自覚的なものにするために道を学ぶことが求められるが、聖人は道を学ぶ努力を怠らないこと、また、中庸を重んじることをその特徴としている。さらに履軒は聖人たる為政者が庶民を教育するという教化策を説くが、その立場はまさしく儒学的であり、懐徳堂の儒者がめざした寛政異学の禁による朱子学振興の方向とも合致する。その意味で、履軒の基本的立場は朱子学と同じだといえるのである。

第四部では、最盛期懐徳堂の儒学における経世思想を考察している。竹山・履軒の儒学は、現実を見据えつつ「修己」「治人」のバランスを重視する立場だったが、その基本的立場が彼らの経世思想に反映されている様相について述べている。

第一章は、理気論や性説という完結的理論にこだわらない履軒が「命」、すなわち運命をその実践の根拠としていた点について検討し、懐徳堂儒学の現実重視の立場を明らかにしている。さらに竹山の儒者意識の分析を通して、彼に主体的経世志向があったことを明らかにしている。竹山はそれを朱子学の「全体本領ノ所」と述べており、「修己」「治人」の双方に通じるという本来の朱子学の立場に彼は従っているのである。

第二章では、竹山がめざした「修己」「治人」をともにバランスよく重視する立場について検討している。まず、「治人」の具体的方策として、政治に主体的に参画しようとする意識のもと、君主教育まで目を向けて、武士教育を通して「治人」に携わることを竹山はめざした。また、竹山は社会全体に対する意識を持つことの重要性に考え至っている。そのようないわば為政者の責任感を意識していたことが竹山の経世思想の特徴なのである。

終章では、社会全体に対する責任感に言及するところに本来の朱子学者として竹山の面目があり、このような責任感をもとにした現実の政治実践に資する学問が竹山のいう実学であることを述べている。この実学重視の立場が懐徳堂儒学の大きな特徴であり、また、懐徳堂儒者と寛政期から幕末期に至る時期の儒者と緊密な関係を築いていたことで、幕末期に至るまでの近世儒学思想史上において懐徳堂儒学は重要な役割を果たしていたといえるのである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　藤居岳人　）			
論文審査担当者	（職）		氏　　名
	主 査	大阪大学　教授	湯浅邦弘
	副 査	大阪大学　教授	浅見洋二
	副 査	大阪大学　教授	宇野田尚哉

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　懐徳堂儒学の研究

学位申請者　藤居岳人

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　湯浅邦弘

副査　大阪大学教授　浅見洋二

副査　大阪大学教授　宇野田尚哉

【論文内容の要旨】

孔子を祖とする中国儒学は、その後、宋代朱子学の完成とともに日本にも伝来し、特に江戸時代の学問や政治・文化に大きな影響を与えた。大坂学問所「懐徳堂」も朱子学の漢学塾として 140 年余りの歴史を刻み、特に第 4 代学主中井竹山とその弟履軒の頃に全盛期を迎えたとされる。しかし、「儒学」「儒者」という言葉を適切に捉えた上で、懐徳堂儒学を学術史上に明確に位置づけようとする試みは意外となされていない。

本論文は、改めて懐徳堂の「儒学」に着目し、特に中井竹山・履軒の朱子学的立場の特質を明らかにし、さらに懐徳堂儒学全体の思想史的意義の解明を目的とする。全体は、第一部「江戸時代の儒者と寛政改革と」、第二部「中井竹山・履軒の周囲の儒者―その朱子学的立場―」、第三部「最盛期懐徳堂における経学研究―中井竹山・履軒の経学研究―」、第四部「最盛期懐徳堂儒学の経世思想―中井竹山・履軒の実学思想―」の四部構成で、序章・終章も含めて計 15 の章からなる。分量は、400 字詰原稿用紙換算で約 900 枚である。

第一部では、懐徳堂の儒者について論じる前提として、まず「儒者」の語と「知識人」の語との関係について検討し、江戸時代の儒者の性格を考察する。その上で、江戸時代における社会内存在としての儒者の存在様態を明らかにする。特に、寛政改革を契機に儒者の性格が変化してきたとして、その様相について考察する。

第二部では、全盛期懐徳堂の中心的存在だった中井竹山・履軒兄弟の懐徳堂儒学の性格を分析する前提として、まず、それ以前の初期懐徳堂（特に五井蘭洲）の儒学の性格について考察する。その後、竹山・履軒と深いつながりのあった後期朱子学派の儒者（特に尾藤二洲・頼春水）を取り上げてその儒学の性格を検討し、竹山・履軒の儒学思想との共通点と相違点とを明らかにする。

第三部では、全盛期懐徳堂の経学研究について考察する。中井竹山については『四書断』を取り上げ、履軒については膨大な経学研究の成果を取り上げつつ、その性説や聖人観の特質を明らかにする。その結果、履軒の経書注釈には、鋭い朱子学批判が見られるものの、基本的な思想的立場はやはり朱子学であったとする。

第四部では、全盛期懐徳堂の儒学における経世思想について考察する。中井竹山・履軒の儒学は、現実を見据えつつ「修己」「治人」のバランスを重視するものであり、その基本的立場が彼らの経世思想に反映されている様相を解明する。

終章では、改めて懐徳堂儒学の特質をまとめ、儒学を真の儒学、すなわち実学に昇華したところに日本近世儒

学思想史上における懐徳堂儒学の思想史的意義があり、また、懐徳堂儒学による実学の立場は、幕末に至る日本近世思想史上において、幕府ないし西国諸藩への実学の波及という形でさらなる展開を見せていったと結論する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、申請者が長年取り組んできた懐徳堂研究の成果をまとめたもので、学術誌に発表済みの多数の論考を基にさらに加筆修訂を加えて再編した研究成果である。

その特長の第一は研究の範囲（視野）の広さであろう。懐徳堂については、近年先鋭な研究が量産されてきているが、ほとんどはテーマを極力絞った内容、あるいは個別資料の報告である。これに対して本論文は、懐徳堂誕生前の大坂の郷学「含翠堂」から幕末・明治時代初期までときわめて広い視野を持ち、博士学位請求論文として重厚な内容になっていると評価できる。

第二は、「儒者」「知識人」「朱子学」など、多くの研究者が当然のこととしてきた言葉を厳密に再定義した上で、懐徳堂儒学の特色を解明しようとしている点である。これも、従来の懐徳堂研究にはあまり見られなかった特色となっている。またこれに関連して、資料に即した手堅い考察も、評価できる。

第三は、思想史研究として、重要な論点を提示できたという点である。日本近世の「儒学」の歴史的展開を展望し、特に、寛政の改革を契機に儒者の性格が変化したとする点、中井履軒の学問が朱子学への厳しい批判に終始しているように見えて、実は、朱子と共通の基盤に立った上での批判であるとする点などは、重要な指摘であると言えよう。

第四に、日本近世思想史上での懐徳堂の役割を再評価した点も重要である。本論文では、五井蘭洲、中井竹山、履軒の考察を中心としながらも、伊藤仁斎、荻生徂徠など、学術的に対立していた学派や人物についても充分に考察し、また、尾藤二洲・頼春水・山田方谷など、交流のあった人物にも留意しており、懐徳堂の外にも考察が及んでいる点は高く評価できる。また、懐徳堂の実学が、幕末から明治時代初期における実学尊重の流れに一定の影響を与えたとする点も、これまでの懐徳堂研究にはあまり見られなかった大きな展望である。

ただ、本論文では、資料的な制約があるとは言え、全盛期懐徳堂の研究が中井履軒に偏重しており、中井竹山の経学に対する考察がやや物足りない印象となっている。また、「修己」「治人」の両者を尊重するのが本来的朱子学と定義した上で、懐徳堂儒学がその本来的朱子学に近づいて行くと推論するが、そのためには、中国思想史全体への目配り、特に中国宋代以降の「修己」と「治人」をめぐる諸見解をさらに精査する必要が感じられる。また、儒者の性格を大きく変えたとする寛政異学の禁については、日本史上におけるその意義をさらに多方面から検討する必要があり、そのためには竹山の主著『草茅危言』の全体像の解明も課題となろう。

とは言え、本論文は、中国宋代から江戸時代までを視野に入れ、懐徳堂儒学の特質を丹念に追究した重要な研究成果である。全体を通じて、テキストに即した着実な考察が加えられている点は高く評価できる。また、日本近世から近代に至る懐徳堂の思想史的意義を再評価した点は極めて重要である。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。